

2006年度教養文化研究所第3回公開講演会報告

教養文化研究所長 本間 邦雄

実施日時：12月6日(水)15時～ 16時45分

講師：橋本ルシア氏

題目：フラメンコを生きる

場所：本学7405教室

12月6日(土)午後3時より、橋本ルシア氏による講演「フラメンコを生きる」が、教養文化研究所主催による本年度第3回目の公開講演会として実施された。橋本ルシア氏は、スペイン留学を経て、数々の多彩なりサイトをこなしている実践的舞踊家である。2003年に国際芸術文化賞を受賞し、2004年にはフラメンコの歴史・芸術を論じた『フラメンコ、この愛しき心 —— フラメンコの精髓』(水曜社)を出版している。

周知のようにフラメンコは、歌、踊り、ギターなどからなるスペインの民族芸術である。その成立そのものも、ヨーロッパ・地中海世界の絵模様が色濃く反映されており、その後も世界中にひろまり、舞踊、音楽、芸術にさまざまな影響をあたえている。その独特のリズムと生命力あふれるパフォーマンスで日本でも非常に人気がある。

講演は、橋本氏の帯同したカンテ(歌)1名、バイレ(踊り)2名、ギター1名によるオープニングで彩り鮮やかに始まった。そのあと登場した講演者は、フラメンコの歴史を、ヨーロッパ・地中海世界に活動する人々の悼みの歌から説き起こした。「フラメンコ」の成り立ち、その歴史と意義についてさまざまな角度から考察され、そのような「フラメンコ」を生きるということには一体どのような意味があるのかが、現代に生きる舞踊家として実践的に提起された。

そして、歌うことと舞うことの、互いに高めあう緊張感あふれる関係について、さまざまな事例をまじえて語られた。なかでも、歌詞の一義的な意味ではなく、“声”そのものが重要であり、それが皮膚に、身体に触れ、舞いを誘発すると語った点が印象的であった。フラメンコに関しては現在もたえず新たな試みがなされていることも知ることができた。

講演の途中や終盤にもフラメンコの華やかな実演が交えられ、一般の聴講客や学生・教職員等300名以上が参加した会場(3405教室)からは、惜しめない拍手が送られた。

フラメンコを生きる

橋本 ルシア

橋本 皆さん、こんにちは。はじめまして。フラメンコ舞踊の橋本ルシアです。どうもありがとうございます。なにぶん、私は舞踊家でありまして、お話はあまり得意ではないので、滞ったりすることもあるかもしれませんけども、どうぞよろしくお願いたします。



ただいま実演してもらいました曲は、「セビジャーナス」と言います。ナスの種類ではなくて、セビージャ、地図ではセベリアと書いてありますが、フラメンコ的になります。セビージャ、その春祭りの踊りです。おばあさんから小さな赤ちゃんまであのような派手な衣装で1週間踊り狂う。ちょっと日本ではないようなお祭りです。最初にご覧いただきました。

フラメンコについてお話しするんですけども、先ほど本間先生からご紹介がありましたように、私は哲学科に在籍しておりまして、将来は哲学者になるつもりでいたのです。けれども、フラメンコ舞踊に出会ってから突然気が変わりまして、フラメンコで生きると直観と激情で始めてしまいました。

最初は、「哲学科の皆さんさようなら」。「橋本さんってばか」とみんな言いました。反省することがない女だと。彼らとは今でもお友達なんですけど。始めたときは鼻息荒かったです。もう、「すぐトップダンサーよ」みたいな感じ。だけど、そんなに易しいものではなかったです。やるに従って悩みが増えました。

一番問題だと思ったのは、私には血がない。冷血漢という意味ではないです、ジブシーの血がないというか、フラメンコの血がない。これが一番大きな私の壁でした。血が1滴でもあればどんなに私は救われるだろう。1滴や2滴はないものだろうか。真剣に探求しました。探しました。その結果、結論を先に言いますと、血の1滴や2滴はあるかもしれないけれどもはっきりしないということだったのです。でも、がっかりしておりません。そのことについてまず述べたいと思います。

フラメンコが成立するためには必要な二つのものがありました。一つはジプシー、それを創る人です。ジプシーがいなければフラメンコは始まらなかった。というのは、初期のころのアルティスタ、アーティストですが、全員ジプシーなのです。ということはジプシーが始めたということです。

しかも、ジプシーも場所が限られていまして、アンダルシアというのはスペインの南のほうの土地ですが、その3カ所。セビージャ、先ほどの踊りの町ですが、そのトリアーナという所と、ヘレス。ヘレスはご存じですか。シェリー酒の有名な所です。馬でも有名です。馬が人間より上手に踊る土地柄です。そのヘレスのサンティアゴ地区。それからもう一つ、カディス、海がととてもすばらしい港町です。そのサンタマリア地区。この出身のジプシーに限られていたのです。だから、アンダルシアのジプシーがいなければ始まらなかったということです。

では、ジプシーがいれば始まったかということ、そういうわけではないです。というのは、日本と中国と韓国を除いてジプシーがいると言われてます。ということは、もしほかでもジプシーが独自に創ったのだったら、ロシア辺りでもフラメンコがあったかもしれないはずですけど、どこにもないのです。アンダルシアだけなのです。

ということは、アンダルシアの土地柄が大切だし、アンダルシアというのは予想外に音楽や踊りを昔からいろんな民族が征服してきて入り乱れて残っていますから、ものすごく豊かな財産があるのです。実際、私も今年の9月にセビージャでの大きなフラメンコの催しがあったので行ってきましたけれども、昔からやられているアンダルシアの音楽と共演するかたちでのフラメンコのダンサーがいて、それを見に行きました。

チャランゴはご存じですか。アラブ人、イスラムの人がやる太鼓です。それと、それよりずっと以前のギリシャ時代の羊飼いを思い浮かべてください。羊の角か牛の角かわからないですが、角笛です。そういうものと共演していましたが、フラメンコの踊り手を圧倒するほどのすばらしい音楽でした。だから、「ああ、この土壤なんだ」と思いました。このように音楽的な、あるいは踊りがとても盛んな土地です。

そういう踊りが、やってきたジプシーをそそのかしたのです。これをやってみようと、ジプシーがそれに自分の味付けをしてフラメンコを作った。だから、ジプシーの存在と、それからアンダルシアの音楽や踊りの土壤がとても重要だったわけです。でも、音楽的な土壤については今回はちょっと時間的に述べられないかもしれません。ジプシーについていきます。というのは、私は1滴でも2滴でもジプシーの血が欲しいと思ったものですから、研究しました。

ジプシーは、大体ご存じだと思いますが、今から4,200年ぐらい前にロシアの南の

草原地帯にアーリア人というのがたむろしてました。住みやすかったからでしょうね。でも、あるとき、大移動を開始するのです。食料事情とか、人口が増えたとか、天候の問題とか、いろいろあったでしょう。東に行き、西に行き、南に行ってます。

東に行ったアーリア人の痕跡は、皆様もご存じかもしれませんが、シルクロードの楼蘭という王国があった。楼蘭の美女のミイラ、白人種です。あれが東に行ったアーリア人の痕跡です。その後、そこでは痕跡が途絶えるのですが、それはアジア系の人と混血していった、アイデンティティーをなくして、もうアーリアを留めていないと言われてます。

ジプシーになるのは東に行った者たちです。カブル渓谷というパキスタン辺りを通して、インダス川の上流にいて、それからインドになだれ込むわけです。インドの西のほう、パンジャブ州辺りにまず行くのです。そこでアーリア人とジプシーとの分離が起こったと、これは言語学者の研究ですが、そうなっています。本隊のほうのアーリア人は、その後、ガンジス川、もっと東のほうに行くのですが、ジプシーはその辺に残る。

特にパンジャブ州でも、ラージャスタンという土地があるのですが、これはパキスタンとの国境にタール砂漠という大きな砂漠があって、ジプシーはその辺りに住んでいます。ここは大変な土地なのです。というのは、インドの西の端ですから、絶えずペルシャ人やイスラム人やらに攻められるわけです。だから、それとの攻防戦。攻防戦ということは武将が育つわけです。1人や2人ではない。その武将たち同士がまた覇権を争って戦っているという戦いの土地。

「ラージャ」というのは戦士ということです。「スタン」は大地です。ラージャスタン、戦士の大地と呼ばれている所です。その辺りにジプシーがいたのです。今でも、ジャート、ジャーティーと言われてるジプシーがいます。

彼らは何をしていたかという、どうも、漂泊する、うろうろさまよい歩く。音楽や踊りを特に事とする。あるいは、鍛冶屋とか、かご作りとか。そういう、顔の色の浅黒い、身分の低い者たちだったとジプシーの呼称(呼び名)の言語学的な分析からわかります。実際に彼らはそういう職業です。

というのは、ラージャがいます。戦争するのに、自分だけでは戦えません。馬が要る。馬がいれば馬の道具、馬具が要る。それから戦う刀が要る。それで鍛冶屋さんが要るわけです。鍛冶屋はジプシーの得意の職業です。それから、勝つかどうか占います。今、湾岸戦争なんかは占っているかどうかかわからないですけど、昔は必ず占いがあった。これもジプシーの女の得意な職業です。それから、戦いの合間に心身を休める。歌や踊り。これもジプシーの得意な職業です。武将たちが随行集団として必ずそのような者を連れていきま

す。だから、最適というか、必要とされた土地だったと言えます。

自分のルーツを探るといので、ジプシー自身も今、研究し始めています。ジプシー自身の研究者は、「そうじゃない」と言います。「俺たちはクシャトリアだった」と言うのです。クシャトリアはご存じでしょうか。インドには四つの階級がありますが、一番上がお坊さん、その次が貴族。その貴族だと。貴族というのは武将なんかも含めます。言えなくもないけども、武将そのものではないけれども、それに随行して行った。

従って、戦に行ったりしてた人たちに、例えば美しい踊り女が見初められて混血していくということが考えられます。だから、言えなくもない説かなとも思います。そういうことをしてきた人たちです。1千万人ぐらいはまだジプシーに留まっていて、インドの中をうろうろしているという報告もあるのです。でも、かなりの部分が西への旅を始めるのです。

どうして旅するのか。大体、悲惨な例が多いです。さっき申しましたように、ラージャに付いて戦うのですけど、必ずしもインドのほうに付かないのです。生活が厳しいから、「こんな所、嫌だ」とか「こんな王様、嫌だ」と思っているのです。だから、攻めてくるペルシャだとかアラブだとかのほうに付いてしまうわけです。勝ったらすごいぞというわけですけど、大体、全部敗退して逃げていきます。負けたらもうしょうがない。一緒に逃げていくわけです。そこで西への旅が始まる。

あるいは、戦わなくても、住んでいると戦があるともう丸焼けになるわけです。だから、悲惨、食べられない。だから、逃げていく。でも、一つだけ望まれていく幸せな逃げ方もあります。逃げるというのはいないですけど。シャーナーメ、フィールドゥーシという人の歴史書に書いてあるのですけれども、ルリというのはジプシーの別名です。中央アジアの人たちは今でもジプシーをルリと呼んでいます。ルリ族1万人が西へ移動したという記録が残っているのです。

どういうことかという、バフラム王、ベーラムグールというペルシャ側の王様がいて、あるとき部下の様子を見ると、お酒を飲んでいるのだけど音楽も踊りも聞いてない。王様はそれが非常に不満なわけです。「おまえたち、どうしてワインだけ飲んでいるんだ?」「王様はいいでしょうけど、お金もないので雇えないし、大体、踊り手なんかがないんですよ」と。王様はかんらんかんらと笑います。

それで、お友達のインドの王に手紙を書いて、「どうかひとつ部下のために踊り手と歌い手をたくさん寄こしてください」と。1万人、あるいは1万2千人が行ったと書かれています。ちょっとオーバーにしても大挙して踊り手や歌い手が西に移動したことがわかります。これは招待されているからすごく幸せな西への移動の仕方です。

そのまま居着くかという、居着いてそこのジプシーになっているのもいますけど、そこからさらに東とか北とか、さらに西へと移動していくのです。アルメニアを通過してロシアとか東ヨーロッパとかドイツに入っていくジプシーもいます。それから、南のほう、サウジアラビアのほうに行ってしまうのもいます。それから、小アジアを通過してイスタンブール、昔はコンスタンチノーブルと言っていたのですが、そこに渡って、ギリシャに長い間いて、それからフランスの南の海岸伝いにスペインに入って、バルセロナ辺りを抜けてアンダルシア、南にたどり着いた。このカレ族というのがいる。

それからもう一つ、フランスの北側を通過してスペインに西の北の一番端、サンティアゴ・デ・ラ・コンポステーラという所があるんですけど、今でも巡礼者が絶えない所です。ホタテ貝をいろんなところに付けて。というのは、サンティアゴという使徒がホタテ貝を付けて旅をして回ったからという由来があるのです。そこへの巡礼というかたちで北に入っていくジプシーもたくさんいました。だから、北にもいっぱいジプシーはいます。でも、差し当たってフラメンコに関係するのは、南に行ったカレ族です。

スペインに登場します。記録上は1425年というふうに文書の中に残っています。でも、残ってないのはもう既に入っていたとは思いますが、文書に残っているのがそうです。何と、貴族の格好をして登場しているのです。トーマス伯、伯爵と名乗って入り込んでいます。というのは、当時、トルコに攻められて十字軍、キリスト教とイスラム教がばちばち戦っていたときなので、コンスタンチノーブル辺りのビザンツの貴族も逃げたわけで、だから、同じ格好をしていけば逃げやすい。

最初はその一派かと思ってスペインの貴族に温かく迎えられる。貴族はお金を与え、食事を与えて、2キロ先まで送っていった人もいます。優遇されているのです。優遇されるにはわけがあって、ジプシーが言うには、「私たちはイスラム教に押されてイスラムに改宗しましたが、悪かったなと思い、キリスト教に改めて改宗しようと思ってローマ教皇のところへ許しを請いに行きましたら、7年間世界を放浪してみんなに謝って回ったら許してやるぞと言われたから、今こうやって放浪しているんです。これがその許し状です」と。本当かどうか知らないけど、書き付けを見せるわけです。ローマ教皇と言われるとみんな弱いですから。そういうのがたくさん入ってくる。

最初の50年間ぐらいはすごく優遇されていたんですけど、だんだん怪しくなってくる。というのは、巡礼だとか許しだとかというのは、カトリックの世界であってプロテスタントはまた違うのです。ヨーロッパの宗教がプロテスタントに変わっていく。そうすると、そういうお札なんかは役に立たなくなってくるのです。もう公爵だとか伯爵だとか言わなくなると、ボスとか隊長だとか言って入ってくるのです。

それからまた、ローマ法王が「どうもジプシーはトルコのスパイじゃないか」みたいなことを言い始めるのです。それでも何かみんな「えー」という感じでジプシーを嫌い始めるのです。だから、ジプシーが来ると、お金を与えて追い払うか、何もやらないで「とっとと出ていけ」と追い払うか、そういうふうになります。

そして、1492年、受験勉強した人は「イシノクニ」と覚えているかもしれないけど、グラナダ王国が陥落してスペインがキリスト教の王国になるわけです。強大な統一国家を作ろうというわけで、うろうろする者は困るのです。それから法律に逆らう者も。だから、ジプシーをすごく弾圧するようになるのです。大体の王様がいろんな弾圧をしています。一番ひどいのは、うろうろしていて、見つかったら死刑だぞとか、あるいは手足をちょん切るとか、そういうふうにするのです。

300年ぐらいその時代が続きます。でも、1783年によくジプシーが市民権を得るのです。その当時、最初入ったところのジプシーの数は15万人と言われているんですけど、1700年ぐらいになると4万人になっているのです。みんな、死に絶えたり、あるいは国外に逃亡したりということなのです。

ジプシーがそんなに数が減っているということは、一般市民も数が減っていて、労働力がすごくなくなりました。だから、労働力を確保するというで市民権を与えられたという意味もあるかと思うのですが、それからジプシーは元気にやりたいことをやるようになった。だから、歌や踊りを活発にやってフラメンコが生まれた。これが18世紀の末と言われています。

代々の国王が300年間にわたってジプシーを弾圧してきた法令がいっぱい残っているのですが、その中に不思議な文章があるのです。「ジプシーの身なりをしてはいけない」、「ジプシーと一緒に住んではいけない」、「ジプシーの踊りを踊ってはいけない」、「ジプシーの言葉をしゃべってはいけない」、あるいは「ジプシーを保護した貴族は罰金」、それから「ジプシーを保護した一般庶民は強制労働」という文章があるのです。「あれ？」と思います。

「ジプシーは一部には愛されていたんじゃないの？」ということなのです。そういう国の側からは胡散臭いものが、実は民衆や貴族にすごく愛されていて、だから困ったなということ弾圧しようという法令が出たのではないかと私は思います。

ここがアンダルシアのとても面白いところだと思うのです。汚いとか、かっぱらいをするとかと嫌われながらも、片方ではとても愛されていた。踊りをしてはいけないということは、みんなが踊りをまねするということでしょう。寄り付いてはいけないということは、みんなが寄り付くということでしょう。だから、アンダルシアでは実はジプシー

は半ば嫌われながら、半ば愛されていた。

アンダルシアの人たちというのは、ジプシーを見てあこがれるわけです。そして昔の自分たちを思い出したみたいです。ジプシーは理不尽なことでなければ従うのですが、理不尽な言い付けには絶対にそむくのです。自分流で断固戦ってしまうのです。だから、16年間も牢獄に入れられても頑張り通したというジプシーもいるのです。そういう、お上に逆らっちゃう気質、それから自由を闊歩しちゃう。それから、歌い飛ばし、笑い飛ばして、悲惨な現実を忘れてしまうそういう強さ。それから、異国的な情緒をたたえた格好良さ。自由ということです。

「いいなあ」と、「待てよ、俺たちも実はそういう気質だったんだよね」と思うわけです。だけど、そういう気質を丸出しにすると牢獄に入れられちゃうから、当面は封印してへつらった格好をしているけど、実はジプシーの気質は自分たちと同じなんだと気付くわけです。つまり、同じものが好き、同じように感じる、そういうふうに気付くわけです。だから、アンダルシア魂、アンダルシア人の心をそのように呼ぶとすればジプシー魂というのはとても似ている。そういうことに気付くから、ジプシーは嫌われながら、半ば愛されていたわけです。

ここで私ははっと気が付いたわけです。「ああ、そうか。ジプシーじゃなくてもいいんだ」と。私は間違っていた。血の1滴や2滴を探してたけど、血じゃなかったんだ。似たような血だったんだ。似たような血というのは、つまり、同じように感じる心、魂なんだ。ジプシーはジプシーではない人をパージョと呼びますが、パージョも今はたくさんアルティスタが出ています。ということは、ジプシーの魂に近い人だったらだれでもフラメンコをやっていいし、だれでもできる。ここまでに至って、私はとても気持ちが楽になりました。

ちなみに、スペイン以外の国に渡ったジプシーはどうだったでしょうか。悲惨です。一番悲惨なのはドイツです。ナチスドイツのころには、皆さん、ユダヤ人のアウシュビッツの虐殺をご存じかもしれませんが、実はその傍らでジプシーもジプシー狩りをやられて、劣等な血だということでアウシュビッツでガス室送り、あるいは、子どもたちも皮膚がんの研究の実験台とかやられているのです。

ユダヤ人と同じようにとても悲惨な目に遭っています。迫害されています。これは極端な例ですけれども、あまり愛されてはいないです。個人的にはそういうことがあるかもしれませんが、ジプシーの女があまりにも美しいのでくらくらとまいったという貴族もいます。でも、大半が差別と迫害の中にいます。

でも、アンダルシアは違うのです。差別と迫害は若干あっても、国には逆らっているけ

ど、アンダルシアの人々や貴族には愛されていた。貴族が愛していた例を挙げます。向こうでは赤ちゃんが生まれたときに名付け親をだれか知人をお願いするのです。それをコンパドレと言うのですが、ジプシーのコンパドレに貴族になっていて、由緒ある自分の王家の名前を与えているのです。スワレスとかレジェスとかという名前が付いている人たちはそうです。今でもそういう名前のアーティストがいます。自分の由緒ある家の名前を与えるぐらいだから、よほど愛していたということがわかります。

ジプシーのことについてしゃべりましたが、そのジプシーが創り上げたフラメンコの音楽や踊り、その中でジプシーが最も好きなたぐいの一つ、ジプシー魂の権化という曲があります。「ブレリア」です。やってみましょう。お願いします。

(演奏)

「ブレリア」という曲です。先ほどちょっと言い忘れました。アンダルシア魂と言いましたが、私は大和魂はあまり好きじゃないので、大和撫子魂と言っています。これもアンダルシア魂と同じであれば、ジプシー魂とつながる、こういうことです。

今の踊りですけど、これは、先ほど申しました馬とシェリー酒の町ヘレスで起こった曲です。エル・ロコ・マティオ、気違いのマティオという名前ですけど、自分で芸名でロコ、気違いと付けてしまうところが面白いです。この人がソレアレスという孤独を歌うゆったりした曲がありまして、当時は最初から最後までゆっくり歌っていた。ところが、最後、スピードを上げてみたのです。そうしたらすごく面白かったので、はやった。その上がったスピードの部分を切り離して一つの曲にしてしまった。それが今のブレリアです。だから、ヘレスで起こった曲です。

先ほどはジプシーの話をしましたけど、これからはフラメンコのお話をいたしましょう。フラメンコというのは、今、実演してもらいましたが、おわかりのように、ギター、歌、踊り、これが一般的なかたちです。これにスペインでは、パルマと言いますが手拍子が加わる場合もあります。4者でやる場合もあります。また、ギターが1人でギターソロを弾くこともあります。それから、歌1人で何の伴奏もなく、自分のパルマとか机をこぶしでたたいて歌う歌い方もあります。踊りが1人というのはないことはないのですが、あまりありません。踊りの側からすれば、3者でやるのが最も一般的なスタイルです。

では、フラメンコの曲というのは何曲ぐらいあるだろうかということ。曲というよりも、曲の形式と考えるいただきたいのですが、50以上あると言われていています。でも、その一曲一曲はアーティストが自分で勝手に創ってしまうのです。ある人がとてもすばらしい歌を歌ったら、すぐそれをいただいてしまって、さらにそれに自分流の味付けしてもっといいものを作っていく。そういうことがあります。

それから、1人の歌い手はいつも同じようには歌いません。同じように歌うのはとても恥ずかしいこと、実力がないこととされています。恥だと。そう考えますと、1曲がアルティスタ、アーティストの数だけあり、またアーティスト一人一人が歌うときに、あるいは奏でるときに、違うから、もう無数にあると言ってもいいです。

この50種類というのは、今後もっと増える可能性があります。というのは、ジプシーは自分の気質に合ったものだったら何でもいただいて全部フラメンコに変えてしまいます。50種類以上あると言いましたが、これは歌が一番、趣、情緒を表しますから、歌に合わせて分類しています。

その歴史について述べてみます。始まりは18世紀後半。先ほど1783年、ジプシーの解放令が出たと言いました。このあと、直後です。日本だと寛政の改革、松平定信などが出たころです。日本ではもう既に100年前に歌舞伎が起っていて、300年から400年前には能も起っていて、世阿弥で完成していた。だから、フラメンコというのは古いようで新しいし、新しいようで古い、そういう芸能です。大昔からというわけではないのです。

一番古いアーティストはだれかといったら、名前は一応特定できています。ヘレスのテオ・ルイス・エル・テ・ラ・フリアーナと言いますが、日本語訳しますとフリアーナお母さんのルイスおじちゃん。向こうの人の名前はそうなのです。エンリケ・エル・コッホというのがいましたけど、コッホはびっこという意味です。日本なら差別用語だけど、向こうは大得意。だから、びっこのエンリケ。こう言って出てくるわけです。

ジプシーという言葉も、実は一般的には差別用語だということで今は使われることを禁止されているのですが、ことフラメンコに関しては、ジプシーという言葉は尊敬語です。ジプシーとは言わないで、彼らはヒターノ、ヒターナと言います。「何て美しいヒターナ」、こういうふうにごうごう歌い上げます。私たちフラメンコをやっている諸外国人にとっても、ジプシーはあこがれの的、尊敬の的。「ジプシー」は尊敬語だから、私はあえて使い続けているのです。

そのテオ・ルイス・エル・テ・ラ・フリアーナ、ルイスおじちゃん、これは歌を聞いた人は今はだれもいないです。だけど、デモフィロという民族学者が、フラメンコが好きで19世紀の後半から20世紀辺りに探して回った、探求して回ったわけです。村々を訪ね歩いた。というのは、ジプシーは書く文字を持っていませんから、聞くしかないから、聞いて回ったのです。

そうしたら、長老、昔のことを知っているおじいさんやおばあさん、そういう人たちが「そういえば、50年ぐらい前にそういうルイスおじちゃんがいて、6曲ぐらいすぐくす

ばらしく歌ったよ」というわけです。そこで、テオ・ルイス・エル・テ・ラ・フリーアーナというのが最古の、一番古いカンタオールというふうに名前を留めるようになったのです。

非常に歌の知識を持っていたということです。ちょっと専門的になりますけど、言ってしまう。「トナ」という曲、マルティネーテとは鍛冶屋のとんかちのことを言います。鍛冶屋さんがとんかちをたたきながら歌っていた労働歌ということのを頭に置いてくださればいいかと思います。その仲間の、それにギターが付いたかたちがシギリージャ、これは人の死を悼む挽歌、死がテーマの歌です。そのようなたぐいが最初でした。これは全部嘆きの歌です。このことを頭に入れておいてください。最初の歌い手が嘆きの歌の何曲かで有名だったということです。

踊りですけど、一般に踊りはあとだと言われていますが、そんなことはないです。記録に残っています。6曲残っています。テオ・ルイスおじちゃんはポロ・カーニャという曲も歌っています。そのポロ・カーニャを踊ったという形跡がある。それから、ソロンゴ・ヒターノ、ジプシーのソロンゴという曲。それから、女だけがやると書かれているサパティアード、足の音技の曲です。サパティアードは足の音技のことです。さっき、ダダダとやりましたよね。あのことです。それから、タンゴ・プリミティブ、原始的なタンゴ。それからロンデーニャ、これを踊った。

踊り手の名前も残っています。ラ・ペルラだとか、ドローレスだとか。ただ、ルイスおじちゃんほどに尊敬されたかたちで残っているのではないけど、ひどく人々を熱狂に導いたというか、もう男の人たちも夢中になってしまったという感じです。靴をはいていたり、素足だったりするのです。だから、初期のころから踊られていた。

ギターはどうでしょうか。実はギターについても書き残したものがあつたのです。カンタオールの孫のものです。おじいちゃんから聞いた話だがというわけです、「当時、ギターはいたことはいたんだけどね、ものすごく下手だったのよ」というわけです。これはフラメンコギターに関してです。スペインというのは昔からギリシャの影響なんかでギターの昔のかたち、キタラと言いますが、それからアラブの時代のギターはウッドと言いますが、とても盛んに弾かれていて上手な人がいっぱいいたのです。フラメンコギターに関してはということです。

当時は、いたことはいたけど、すごく下手くそだった。技術がないのです。今はカポタストと言って調弦する道具が発明されましたけど、当時はなかった。二つの調でしか弾けなかった。歌い手のほうがギターの音に合わせようとしたのです。だから、クラシックのように澄んだ音だと、はずれているのがバレてしまいます。がさがさ声、しゃがれ声だと、はずれたのがあまり気が付かれないのです。だから、努めてしゃがれ声を出そうとし

たと言われていました。

そのしゃがれ声をラホの声と言います。ラホ、ひび割れということです。実はフラメンコの最高の声だと言われていています。面白いですね。苦境に陥って知恵が浮かんだという感じです。ギターは最後ですけど、でも、だんだんギターを弾くようになってきたら、あっという間に進歩しました。そして、1960年代には、ラモン・モントーヤとか、パコ・デルシアなんか、ご存じですか、ちょっとマニアックかな、完成のときを迎えたとされています。

歌はもう最初からものすごい人が出ているわけですから、それよりも以前に完熟していました。踊りはあったんですけども、熟したのはやはり20世紀以降、カルメン・アマージャと言うんですけど、私たちの世界では「フラメンコの女王」と言ってます。彼女が出てから圧倒的に技術を得て、また曲の数も増えて、世界じゅうに広まるようになった。彼女の出現で踊りは格段に飛躍した。だから、完熟のときを迎えたのは踊りが一番遅いと言ってもいいと思います。

今、私は踊りと歌を当たり前のように分けてしゃべりましたが、これは考えるたびに変わらなす思います。自分のことを考えてみまして、人間の実際の行動はそんなものではないだろうと思うのです。自分で歌いながら踊っている。心の歌があるから体が動く。歌がないときは体が動かない。踊ろうと思わない。フンフンとかスカットだったりするんですけど、歌があるから踊るだろうと思うわけです。

逆に、歌い手を見ます。フラメンコの歌い手のことをカンタオール、女性はカンタオーラと言います。彼らの身ぶりを見てみますと、最古の曲というのは嘆きの歌でした。嘆きの歌はゆっくりと深い感情を込めて歌います。突っ立ってこういう感じでは歌わないのです。歌い手たちの姿を見ると、目は白目になったり閉じたり、手を握ったり離したり。あるときは手を差し伸べたり、自分の体を抱いたり、ひどいときには椅子から飛び上がって転げ落ちたりします。踊りですよ。これは踊りなんです。

マサイ族の踊りというのがあるんですけど、ご存じですか。これはただひたすらぴょんぴょん飛ぶだけです。これも踊りと言うのだったら、もっと複雑な踊りだろうと私は思います。踊ってると思うわけです。だから、歌い手が同時に踊り手。というのは、歌が非常にまだ未熟で速度も緩やかだからそれができた。歌と踊りというのは一つの体に留まっていた。そういうふうに私は思います。

ところが、先ほどヘレスのエル・ロコ・マティオの話をしましたけど、ゆったりじっと歌ってるのがだんだん面白くなって、最後は上げていくのです。最後は、スピードを上げたり、力強くしていく。面白くなってくる。つまり、進化が始まる。進化が始まると、

速い速度で力いっぱい歌いながら力いっぱい踊るということは不可能です。自分でやってみればわかります。ぜーぜー、はあはあ言う。どちらかの振る舞いを止めなければ両方成立しなくなります。そこで初めて二つの体を要求するようになった。踊り手と歌い手に分かれていった。私はこのように考えています。

進化で、歌い手、もっぱら歌う人、それから踊り手、もっぱら踊る人、二つの体に分かれた。でも、もともとは同じものだった。一つの体でいた。だから、歌うことは踊ること、踊ることは歌うこと。だから、私は、声には出さないけれども歌いながら踊っています。ギタリストもきっと歌いながらギターを弾いています。ニーニョ・リカルドという名手がいまいたけれども、彼は録音に歌っているのが入っているのです。フンフンうなっているのです。きっと歌い手も心の中で踊っていると思います。身ぶりもそうですから。

だから、歌は踊りとともにあった。しかし、どっちが先かといったら、やはり歌うほうが先ではないかと私は思います。力いっぱい心を込めて歌うことが、必然的に体の動き、踊りを発生させた。そのように思っております。

フラメンコは嘆きの歌から始まった。でも、これはフラメンコだけではないのです。人類の最初の歌は嘆きの歌です。というのは、素朴に考えますと、私なんかは楽しいときに小鳥のように歌うかなと自分で思っていたんですけど、どうも人間はそのような存在ではないみたいです。古代ギリシャ、紀元前500年だから今から2,500年前の人です。ヘロドトスという歴史家がいまいた。この人は世界じゅうのことを書き残しています。といっても、当時はインド辺りからイベリア半島辺りまでで、アメリカ大陸はまだ発見されてないから範疇外ですけど、ものすごく細かく、実際に行ってみたのか人から聞いたのかわからないけど、書いている。

その中に、ギリシャの「リノスの歌」というのを書いているのです。ギリシャではリノスの歌と言われていた歌が、よその国々や民族では別の名前と呼ばれながら同じように歌われている。エジプトではマネロース、メソポタミアではタムズ、フリギア辺りではアッティス、ギリシャではアドニス。アドニスといったらぴんと来られますか。とても美しい若い青年で、ビーナス、アフロディーテの恋人。早く死んでしまうという。このような別々の名前で別の民族が歌っている歌が、でも同じ歌だと言っているのです。

このリロスというのは、ギリシャではウーラニアという天のミューズ、女神の息子でアポロンとの子どもです。豎琴が上手だった、音楽の神様です。若いうちに死んでしまう。母なるウーラニアは悲しくて悲しくて、だからとても美しい声でその挽歌を歌った。それがもととなって、ギリシャではシュンボシオン、パーティー、人々の晩餐会だと思ってください、その最初と最後にリノスの名前を呼び続けながらそのリノスの歌を歌った

とされています。

ギリシャではまた1千年にわたってその歌がソフィストケートされた麗しのリノスというのを、地中海だからブドウがたくさん取れるので、ブドウ狩りの収穫祭のときに歌った。イリアードというホメロスの書物の中には高く美しい声で歌ったと書かれています。

ギリシャではそうですが、そのほかの国々は異様です。すべてが穀物神、食物の神様、小麦とかの神様です。小麦を見ますと、春に芽生えますね。夏に炎熱に焼かれて死んでしまいます。死んでしまったら困るわけです。来年芽吹かなければ、自分たちは食べられない。死んでしまいます。だから、どうか生き返ってねという死を悼む歌が歌われるわけです。踊りもやられていた。これが死と再生の豊穡の祭りというものです。

この記録はものすごく異様です。一番異様なのが、フリギア、リュディアです。みんなが歌いながら、踊りながら、楽器もものすごいです。カスタネットがありました。それから、太鼓のたぐいのティンパニー、それからニューバチと言いますが、どうもお皿か何かをたたいていたのではないのでしょうか。それからブルロワラー、角笛みたいなもの。要するに、ものすごく激しい音のするものを鳴らし続けた。

どうしてかという、そういうものはアニモ、魂を目覚めさせる、活気付ける力があると信じられていたから、そういうものを総動員して、その音楽に乗って歌い、踊り狂っているのです。踊り狂っていると、あるとき、狂乱に陥ります。そうしたら、そこらじゅうにある刃物を取って自分の体をめったやたらに切り刻むのです。血だらけになります。中に、男の人がファロス、おちんちんですけれど、これを切り落としちゃう者がいる。そうしたらその人が司祭になる権利を得るわけです。

もう考えたらぞっとするような血みどろの祭りですけど、血を流すことによって、死んだ神に一体化しようとしたのではないのでしょうか。だから、今やられている日本の農民の秋祭りみたいなのかなものではなくて、それこそ間違いじみた熱狂の祭りだったので、

そこでカスタネットが出てきます。それから、悼む歌です。挽歌です。お葬式歌。そういうようなことを考えると、フラメンコの曲の核心だといわれているシギリージャの曲があって、大好きなんですけれど、これは悼む歌、死んだ人を弔う歌です。以前は女はカスタネットを持って踊っていたのです。悲しい曲なのに、どうしてこの曲だけカスタネットを持って踊るのだらうと思ったのです。ルーツはそこかなと思って調べてみました。

そうしたら、その葬式歌や踊りというのは、イベリア半島のことについて話しますと、ギリシャ人も来てるし、フェニキア人、つまりアッティスなんかを祭っていた人たちも来

ているのです。だから、やられていたはずです。事実、証拠がある。セビージャから40キロの所にカルモナという所があるんですけども、ローマ時代の墳墓、ネクロポリス、死んでも楽しく生きられるように死んだあとの町を作っているのです。要するにお墓です。

山一つがお墓になっていて、行ってみましたら、ものすごく壮大な神殿がいっぱい埋まっているのです。そこにやはりさっき言いました血みどろの祭りで悼まれたアッティス。アッティスたちは必ず恋人を持っています。年上の地母神、母なる大地の神です。アッティスの場合はキュベレと言いますが、アドニスの場合はアフロディーテ、ビーナスです。タムズはイシュタル。こういうふうに対になっています。全部、繁殖とか、小麦の生産とか、そういうことをつかさどるんですけど、そのアッティス・キュベレの墓がありました。

象の墓と呼ばれています。大きな石棺がありまして、その上に象が載っているのです。本物じゃないですよ。土器で作っているものですけど、茶色いお鼻があって。今はそこは野ざらしだから博物館の中に入れていたんですけど、象の墓と呼ばれて、アッティス・キュベレの墓。ということは、つまり、ローマのネクロポリスなので、ローマがイベリア半島を征服したときもそういう信仰はあったということです。ローマは国教はキリスト教ですけど、寛容なので、ものすごく心が広い、大きい。だから、もうどんな神も全部いいよというわけです。その痕跡があります。

その次に、ゲルマン民族の大移動の発端を作った西ゴート族というゲルマン民族がスペインに入ってきて、300年間ぐらい統治するのです。彼らはもともとがフン族に追われてローマになだれ込んで、ローマの傭兵になっている。だから、ローマ語がぺらぺらです。自分たちもローマ人だと思っているぐらい。ローマの文化なんかをそのまま継承している。ということは、ローマが寛容だから、その前の時代の文化は全部いただいている。

その中に、キリスト教の偉いお坊さんでイシドロという人がいました。宗教会議を開いています。カトリックですから、異教の神々がはやっては困るわけです。さっき、フラメンコが始まった3大メッカの中のカディスということを行いました。港町です。ここで葬式歌。それから、踊りがもう熱狂的にはやってもならん、困る、だから弾圧しなきゃならない。宗教会議でそういう文章を書き残しているのです。ということは、キリスト教が認められない異教のそういう弔いの歌と踊りがまだ熱狂的にやられていたということです。痕跡がある。

次がモーロの時代。モーロというのはスペインに入ったイスラム教徒のことです。西ゴートのあと、スペインを800年ぐらい統治します。そのとき葬式はどうだったかと

というのは、文章はちょっと見つからないですけど、人口が増えて墓場まで人が進出して
いって、歌や踊りは墓場でやっていたみたいな記述は残っています。でも、ちょっとわか
らないです。

1960年、20世紀の後半、ついせんだってまでアンダルシアではエンデーニャと
いう曲があったそうです。弔いの曲です。そして、職業的な泣き女。泣き女というのは、歌
い、踊りで、泣いて弔う。職業的なそういうプロフェッショナル。それが歌っていたのが
エンデーニャと言って、研究者によると、これがさっき言いましたフラメンコのシギ
リージャと詩形がそっくりということです。そういうことを考えますと、私は、シギリー
ジャの根は、昔の嘆きの歌、リノスの歌にあるだろうと思っています。

言い残しましたが、リノスの歌はエジプトではマネロースの歌と言われています
が、これは古いのです。マネロースは初代王の子の名前だと言ってます。早く死んでし
まったので、やはり国民が悼むために、マネロースの名を呼びつつリノスの歌と同じ歌
を歌っているのです。その名を呼び歌うことが弔う、悼むことだったということです。こ
れがエジプトでは最初で唯一の歌だと書かれています。唯一です。しかも最初。というこ
とは、最初は嘆きの歌で、しかもエジプトでは長い間、唯一。これはとても面白いことだ
と思います。人間って不思議だなと思います。明るいと思ったけど、そうでもないかな
と。

自分としては、人が死んだときにはあまり歌いません。楽しいときにフンフン歌いま
す。どうもこれは生活が安定しているせいではないだろうかと思います。まあ、そのこと
はさておきまして。

シギリージャの根はリノスの歌かなと言っておきますけど、そう言ってる研究者は今
のところ私だけです。でも、みんなはヘロドトスとかを研究してないから、民族学者だっ
たり、音楽研究専門家だったりするから、そこまで至らないのです。哲学的な観点とかそ
ういうのが抜けるから見つけられなかったのだろうと思います。私はスペインでこれを
提起するつもりでいます。すごい鼻息ですね。

話を元に戻します。歌と踊りの関係です。先ほど、「最初是一个の体の中にあった。それ
が進化すると同時に分かれた。でも、踊り手は歌を心に抱いて踊る」、こういうことを言
いました。その歌と踊りのことですけど、踊りについて鋭い分析をしている日本人の学
者がいます。民俗学者の折口信夫と柳田國男です。

踊りには舞の側面と踊りの側面があるというわけです。踊りというのは上下運動、舞
というのは回ること、旋回運動だと分けています。柳田國男の場合はさらにそれに歌と
の関係を分析しています。柳田國男によりますと、踊りというのは、歌はあるけど二義

的、一番重要な意味を持つわけではない。踊りたいがために踊る。これが踊りだというわけです。上下運動が主。ということは、つまり、彼らは歌を音として聞いて、自分も打楽器として共演している気持ちで楽しんでいるのではないかと私は思うのです。

舞のタイプはこれとは正反対です。歌が大切。歌がないと始まらないです。歌をじっと聞く。じっと聞いてると、もうたまらない気分になってくる。もうすぐくたまらなくなったときに、人々はすっと立ち上がって舞い始めました。このように書いてあります。

ここで私ははっと気が付いたのです。フラメンコの踊りをよく見てみますと、まさしくこの二つのタイプです。一つは、男性舞踏手によくあるかたち。足の音をいっぱい使って、最初から最後までバリバリ足の音を入れながら踊る。この人たちにとっては、やはりさっき言いましたように、歌はもちろんなきゃいいけないんだけども、二義的で歌詞なんかどうでもいい。音楽として楽しい、音として楽しんで共演しているのだろう。それはそれでいいと思います。

ところが、舞のタイプ、これは女性のタイプに多いです。しかも、ジプシーの女性のタイプに多いです。歌い手が歌います。歌っている間、踊っているんですけど、旋回運動というんですか、ぐるっと回りながら、目を閉じたり、もうほんとに閉じてしまっている人もいます。薄目を開けている人もいるけれども、前をかつと見たりしないです。じっと歌を聞いている風情です。歌がけいれんすると、自分の体もけいれんするのです。歌がやみますと、その歌から得たインスピレーションとイメージを自分の中に取り込んで、激しく自分の世界を展開していきます。

こういう踊り方。これをフラメンコの舞のタイプと呼んでいますけど、やはりまさしくあります。この舞のタイプが最もフラメンコ的な踊り方だと私は思って好きなのです。自分もそのタイプです。舞のタイプにとっては、歌がなければ始まらない。歌をじっと聞くことが舞の最初である。こういうことです。

では、その歌ということについて。舞のタイプの踊りの人にとってはなくてはならないもの。でも、例えばファルーカとサパティアードという曲は歌がないのです。ある場合もあるんですけど、基本的には歌がないです。これはどうかといったら、それはギターの音色を聞きながら歌としてとらえているのです。あるいは心の中で自分で歌っているから、他者を要求しない。それだけのことだと思います。だから、歌をじっと聞くこと。あるいは、歌を取り込んで自分の心をじっと聞くこと。これが舞の最初でした。

では、歌についてちょっと話してみたいと思います。フラメンコ的な歌の歌い方は、さっきお聞きになったからおわかりだと思いますけど、さっきの歌い手の場合はかなり

伸びやかな声をしておりますけど、がさがさ声の歌い手が多いのです。これはラホの声、エル・フィージョと言って、フィージョ風の声で、最高とされています。エル・フィージョというのは、フィージョというおじさんが初期のころにしまして、その人がそういう声でものすごく上手に歌ったというので、フィージョ風の声とされています。

だから、クラシックの人だったら顔をしかめる声です。地声を張り上げる。それからあと、ミの旋法と言って、弔いの曲の調性というのはエル・モード・デ・ミの旋法なのですが、ミに落ちていく、ラソファミ、ミに落ちていく。それは詩を朗じやすいからギリシャで大発達したのです。

ドリア旋法とか、その後中世になってねじくれてフリギア旋法とされています。これがまさしくフラメンコの中心の旋法です。だから、多いのです。もちろん短調や長調もありますけど。ミの旋法の問題は、詩を語りやすい、歌いやすい。それともう一つ、単純な思い、感情を最も出しやすい旋法だと言われています。1人でやるものです。合唱ではないです。そういうミの旋法もあるのです。

それから、すごく激しいリズム、複雑なリズムを取ったりする問題もあるんですけども、私がフラメンコの一番の特徴だと思うのは、メリスマとさっき言ったラホの声です。ラホの声はいいでしょう。メリスマ、ご存じですか。メリスマというのはこぶしのことです。だから、言葉の1シラブルをぐーっと引き伸ばす例えば愛なら「アイー」とやる。そうすると言葉が収斂されてしまうのです。アイウエオのどれかに、母音に。だから、シラブルを引き伸ばすと母音が出てくるということです。その母音を振るわせるのです。民謡なんかを思い浮かべていただくとわかりますね、こぶし回し。あのことです。母音を振るわせるわけです。

振るわせているうちに何が起るかという、例えばイを振るわせていたら、意味が脱落します。イの意味はないですから。意味が脱落していく。ぼろぼろこぼれていくわけです。では何もなくなるかという、そういうわけではないです。母音が出てきて、母音を振るわせたら意味が脱落する。その次に何が起るかといったら、突如として声がわっと登場してくるわけです。声にじかに触れるわけです、意味がなくなるから。

声に触れるということはどういうことかという、声が私の体に触れてくるということです。私の体の表面はすべて皮膚です。だから、皮膚、肌のあちこちに声に触れてくるということです。猫なで声とか、とがり声とかありますよね。これは皮膚感の言葉でしょう。だから、実はだれでも知ってることです。

歌が意味ではなくて声になって体に触れてくる。皮膚に触れてくる。なでたり、ふわっと包まれたり、つねられたり、突き刺されたり、そういう感覚があります。皮膚感です。そ

の声は強度があります。それから、律動、リズムがあります。躍動感。それから陰影があります。「えー！」って言ったり、「えー？」って言ったりします。それから、つやもあります。こういうもので皮膚をなぜられたり、トントントンと心地良くたたかれながら、私たちはフラメンコの歌い手の心の思いの深さを知るのです。

フラメンコの歌はこういうやり方です。耳で聞いて意味を分析して、「ああ、こういうことか」と考えるものではないのです。言葉がわからない、スペイン語の意味がわからない、だからわからない。こういうものではないのです。もちろん、どうしてもいいわけではないです。意味もすばらしければ、とてもイマジネーションを激発するから楽しいですけど、音で十分なのです。

それを、音の肌触り、テクスチャーと言いますが、バイオリニストなどは音の肌触りと言いますが、そういうもので十分なのです。気持ちはわかる。猫だって、声の出し方で、日本語をしゃべっている私のことがわかりますから、人間はなおさらです。皮膚で感じる。そういうもので十分なのです。

人間を考えてみますと、赤ちゃんのときはまさしくそういうことをやっているのです。赤ちゃんは言葉の意味を知らないですから、お母さんやお父さんが話しかけたりする声を聞きながら、その声の調子で、愛されているとか、おなかが減ってるのを満たされる幸せを感じている。だから、何か意味があるだろうと、多分、予兆していると思うのです。けれども、小学校に上がり、だんだん学歴が付いてくると、言葉を覚えてくる。そうすると、実は肌で感じていたそういうものを忘れて、耳で意味を分析しようとし始めるのです。耳だけの意味の解析作業になってしまうわけです。そうすると、面白さが脱落する。

意味を分析していったって人の心がわかるといいますか。学術論文なんかだったらいいと思います。でも、日常生活でよく味わうのは、人の言葉と本心とは違うなということです。ほめられているのに実はけなされていたり、「言葉って人となかなかコミュニケーションできないな」ということが多いと思われませんか。私だけかな、不幸なのは。それは、言葉を、耳の作業として意味を解析することだけしながら聞いているからなのです。

だから、フラメンコの歌も耳で聞くとつまらないです。肌で聞くべきです。フラメンコはそこが面白いという歌い方を一気にやります。しかも、ラホ声です。ラホ声はざらざらしているから、皮膚をブラッシュします。心地良いのです。フラメンコは、近代人の音楽の聞き方とか詩の聞き方とかを一挙にくつがえしてしまう。原始的な方法に戻してしまうということです。そこで、歌い手の思いを直接にばっと受け取る、理解するということが、

いいギターや歌の見分け方をお話しします。こういう考えにのっとりすると、CDでも何でも聞きますと最初に言葉が、歌詞が飛び込んでくる歌は下手な歌だと私は思っています。二流です。大体そうです。いい歌は、意味とか言葉とかじゃないところから自分に感動を与えてくるのです。だから、言葉がぼんと飛び込んでくるのは下手だと思われて大体結構です。

ギターもそうです。ギターを耳までで聞くと、耳に入ってきて、それからいいなと心にぼんと落とす。こういう音が多いのですが、これも下手。一流のギタリストというのはそうじゃないのです。私の場合は、体の後ろまで音が回ってきて、首筋、背筋をなでるのです。もうぞくぞくしてたまらなくなるのです。そういうのが一流というか、すばらしいギタリストだと思っています。

ギターだけではないです。お古い方はご存じかと思いますが、ジャズのホルンというテナーサックスの人がいましたけど、あの人の音もまさしくそうです。背筋を、首筋をなでられるようなぞくぞく感があります。私はこれでいい悪いを判別しています。そこまではよろしいでしょうか。次に進みます。

舞のタイプの踊り手にとっては、歌はなくてはならないものだった。では、両者はどういう振る舞いの関係だろうかということです。歌からいきますと、自分一人で歌うときは勝手に自分の世界を展開すればいいのですが、踊りがある場合は、踊り手を理解しようとして、踊ろうとしていることを理解しようとして、それに合う歌を探して、あるいは創って、一生懸命に踊り手のために歌います。一生懸命に身を捧げるのです。自分を捨てて献身、奉仕するのです。

踊り手のほうはそれを、「こんなの嫌だ」とかそういうふうにしなくて、もう一生懸命聞こうとするのです。もう何の迷いもなく、否定もなく、全面的に受け入れようとするのです。受け身、受動。だからもう、懸命の献身と懸命の受動との関係が成り立っているのです。

歌い手のほうからいうと、一生懸命献身して、ずっとこう砂にのめり込むような感じではなくて一生懸命に受け止められているということは、無批判に自分が受け入れられているということです。これは人間、すごくうれしいことです。自分の気持ちが人にすっと通じることが一番の幸せだと私は思っています。

何の否定もなく自分をぱっと受け入れてくれる。それがわかるということは、とても温かい気持ちになって、涙がこぼれそうになる。人間の幸せの一番だろうと思っているのですが、まさしく歌い手はそれを感じます。踊り手が一生懸命聞いて、わかろうとしてくれている。だから、お互いにそういう温かい人間的な、でも非常に原始的な関係が実は

成り立っているのです。

フラメンコはこういう原始的な関係です。複雑な関係は全部払い取ってしまって、人間と人間がお互いに献身し合い、受け止め合う。お互いに励まし合って、助け合って、楽しい音楽を作っていく。こういう世界です。だから私はフラメンコが好きなのです。このように思ったときに、「ああ、やっぱり私はフラメンコに入るべくして入ったんだな」と思います。私は人恋しいです。甘えん坊なタイプだから、人がいないと生きていけない。批判されるのは嫌い。受け止められたい。全面的に受け止めて、いつも恋していたい。こういう感じです。だから、まさしく歌い手と踊り手の関係が最高に好きです。

ギターもそうです。ギターというのは歌い手と踊り手両方に献身するのです。両方から受け止められているわけです。私の場合は、特にギタリストは自分の半身だと思っています。後ろのほうに座って弾いているんですけど、いつも耳の後ろにいるような気がして、ささやいたり励ましたりしてくれている、そういう存在です。ここでは非常に原始的に温かい人間の関係が生まれているのです。フラメンコを演じているときだけ、その幸せな状態に戻れて、幸せを味わえる。

こういう意味で、コレスポンデンスという言葉は私は使いますが、シンクロと言ってもいいかな。気持ちを、励まし合いながら、一生懸命に力を尽くしながら、体の振る舞い方は違うんですけど、同じ世界をかたち創って楽しんでいる。そこに生まれるのは幸せな感情だけです。

すぐく興に乗ったときのアルティスタの顔を見てみましょう。今日はまだ興に乗ってないみたいで、そういうふうには見られないんですけど。冷たい顔をしていますけど。もう興に乗ったときにはみんな、赤ちゃんがさらにだらしなくなったようで。ごめんなさい、赤ちゃんのことをだらしないなんて。そうじゃないんですけど。歌い手も、踊り手も、ギタリストも、もうよだれが垂れそうな、幸せそうな顔をしている。まさしくそういう状態になっている。

フラメンコは、ソクラテスの言葉を借りれば幸せの産婆術、幸せを作り出す最も有効な手段だと私は思っています。だから、とても好きなんです。では、ギターと歌と踊りが一緒にそろえば、いつでもその幸せな状態を作り出せるか。そう甘くはないです。下手くそだったら、もう気になって、そんな相手に献身とかそれどころではないです。イメージネーションどころか。だから、ある程度の技術はなければいけないんだけど、技術があったらどうかというと、技術があってもいつでも創り出せるわけではないのです。

ここでちょっとあくびのことを言います。あくびがうつるということをご存じですよ。あくびはうつるのです。でも、うつる動物は限られていて、人間とチンパンジーだけ

です。京都大学霊長類研究所、アイちゃんというチンパンジーを研究している先生がいるところですが、あの先生の研究です。チンパンジーもあくびがうつるのです。テレビで見たんですけど、赤ちゃんのチンパンジーをお母さんが抱いて、赤ちゃんがふわーっとあくびをします。そうすると、お母さんも一緒になってふわーっとあくびをします。うつるのです。これは人間とチンパンジーだけだと言われています。

つまり、何が重要かということです。ほかの動物はだめです。知力、知性です。つまり、人の気持ちをわかったり想像したりする。人の気持ちに同調したりする。そういう知的な働きがないと起こらない。人間とチンパンジーだけはそれができる。だから、あくびがうつる。

ここでひらめきました。フラメンコの場合も、歌手もギタリストも踊り手も知性がとても大切なんです。知性といっても学問ということではないです。「だってジプシーは学問しないじゃないか」という反論があるでしょうけど、おっとどっこい、そうは言わせない。私はジプシーの友達が何人もいますけれども、ジプシーはすごく賢いです。野生のインテリジェンスと呼んでいるのですが、目と目を見ます。一言、二言話し合うだけで、その人間をずばっと直観的に見抜いてしまうのです。

当たり前ですよ。そういう力がなければ、長い間、放浪して、嫌われて、差別されて、ある人と出会ってその人と仲良くなった、殺されるかもしれないというときに、判断を間違えると死ぬわけですから、ものすごい速度で見抜くのです。

何人もジプシーのお友達がいます。みんなそういう目をしてしています。どういったらいいのかな。深い目です。鋭い目です。一言二言話すとき気持ちが通じてしまうので、私もつい大学時代のお友達のように「何学部だった？」みたいに言いたくなるぐらい、インテリジェンスを感じます。

それから、スペインの国策、教育政策が今変わってきています。スペイン人でも50歳代までは教育があまりなされなかった。文盲が多かった。いっぱい子どもを生ませて、労働力にした。だから、一人一人に教育費は割かれない。ほとんど文字を書けないような人が多かった。

ところが、今の40歳代以降、特に30代は顕著ですけど、政策が変わって、少子化して子どもを少なく生んで1人にいっぱいお金をかける。教育をいっぱい与えるようになっていきます。だから、今の40代、特に30代の踊り手や歌手はばりばり本を読みます。そして模索します。「こんなものでいいの。世界にはもっとすごい芸術があるじゃないか。これに立ち向かうにはどうすればいいか」と。本を読みます。ほかのジャンルの人と話し合います。だから、すごく、私たちが思っている以上にインテリジェンスを持っ

ています。今までなかったものだから、砂漠に水が染み込むように知識が浸透しているみたいです。

だから、日本人もうかうかしてられませんね。血がないんですよ、血がない。まあそれはいいとしましょう。でも、土壌もないのです。そのうえ知力もなければ太刀打ちできない。だから、心も磨かなければいけないと思います。

それからもう一つ、歌ったり踊ったりしている間だけ楽しいんじゃないか、幸せ感が続くのではないかとちょっと思っていたんですけど、実際にそうじゃないということがわかりました。今年、スペイン人たちを呼んでライブをやったんですけど、もう心の中が震えるような温かい、体の芯が震えるような幸せ感を得たのです。それは終わってから、今もずっとです。「ああ、私の考え方違った」と。

私は今話しているようなことをもっと詳しく本に書いています。2003年に出したと本間先生に紹介していただきましたけど。その最後に、「私たちは異なる身体の振る舞いを持ち寄って一つの場に集まり、しばし至福のときを過ごすのである」と結びましたけど、間違いでした。「しばし」じゃないです、「ずっと」です。この点を訂正しておきます。

踊ること、何てあほらしいことでしょうね。踊るあほうという言葉がありますね。考えてみれば、あほなことですね。幸せになりたい。何て単純なことを言うの、私ってばかだなと思うんですけど、そのあほな、愚かな道を今とても楽しんで生きております。本日はどうもありがとうございました。

司会者 質問の時間を10分ほど取っていただいたので、会場の方で、この際、フラメンコに関して、あるいは橋本ルシアさんに関しまして、何でも結構ですから質問のある方は手を挙げてください。どなたか、何でも結構です。はい。

— すいません、たいした質問じゃないんですけど。今、アンダルシアにいらっしゃいますでしょうか。今住んでらっしゃるといことです。日本にいらっしゃるときとアンダルシアにいらっしゃるときと、どちらのほうが多いんですか。

橋本 向こうの人と結婚している人とかもいます。私の生徒も実は向こうの非常に有名な歌手の奥さんになって、ヘレスの・・・。

— いやいや、橋本さん自身がアンダルシアにいらっしゃる時間が長いのか、日本にいらっしゃるのか。

橋本 それはときどき行くっていうこと。日本に住んでいて、ときどき、いろいろ探して回ったり、さっきのエンデーニャなんかを探し回ったりして、絶えず行っています。今は本拠地です。でも、心はスペインで死にたいなと思っています。ヘレスで死にたいなと思っています。

本気で家を探したこともありました。でも、日本政府がなかなかそういうことを認めないみたいで、税金とかの手続きがすごいのです。2年以上かかる。だから、向こうの人と結婚してセビージャに住んでいる人なんかもありますけど、まだ国籍は日本のままです。難しいみたいですよ。でも、いつか向こうで死んでやると思っています。

— 橋本さんは日本人なんですよ。ルシアさんというお名前は どうしてなんでしょうか。

橋本 この名前は、パコ・デ・ルシアから付けたとみんな思っているんですけど、違うのです。「ああ」じゃなくて、違うのです。パコ・デ・ルシアの熱狂的なレコードから入ったというのもあるんですけど、実は違うのです。スペインの聖女、聖なる神にお仕えする女の人の中にセントルシア、イタリア語でサンタ・ルチアです。スペインでルシアと言うんですけど、光をつかさどる聖女です。めくらなんです。というのは、自分の両目をお盆の上に載せて人々に奉仕する。だから、光をつかさどる女神となっているのです。ルシアというのは、何となく好きだなと思って、洗礼名を付けました。

— クリスマンなんですか。

橋本 洗礼名ですけど、私はクリスマンではないです。私はどっちかという太古の異教の神々を、大好き。

— 大和撫子。どうもありがとうございました。

司会者 ほかにございますか。はい、どうぞ。

— フラメンコというのはスペインの踊りなんですけど、同じフラでもハワイにもフラがあって、スペインでもフラ、ハワイでもフラ。何か共通点がございますか。

橋本 ありません。私が始めたころ、ウン十年前ですけど、岡山出身なんですけど、東京で習っていて、岡山に帰ってフラメンコの本を探したんです。そうしたら、「フラミンゴは知ってるけど、フラメンコは知らない」と言われました。そういう時代から始めてたんです。

フラはフラでも違うのです。ハワイアのほうはフラと言いますが、フラメンコはフラとは言わないです。全く異質です。あちらは海や山の神に、手先が意味を持っています。フラメンコは日常の「いらっしゃい」だとか、ブドウを摘むとか、そういう、教養のない素朴な人たちから始めたから、日常の身ぶりをしながらそれに思いを込めて普遍言語とかかしていくので、全然違うのです。だから、意味を持たない。全く違うのです。残念でした。

— そうしますと、踊りに同じ「フラ」が付いているのは、全くの偶然ということですか。

橋本 私が始めたのはですか。

— いや、違います。フラが付くのは。

橋本 フラでは切らないのです。そういう単語じゃないのです。

— ああ、続いているのですね。**橋本** そうそう。フラはフラのダンスでしょう。でも、フラメンコは違うのです。フラメンコなのです。フラメンコは形容詞だったんです。きらびやかなとか、燃え上がるという。フラマ、炎という言葉がもともとで、その形容詞、フラメアンテ、燃え上がるとか、新しいとかいう意味もあるけど、それがなまってフラメンコになった。

最初はジプシーのことをフラメンコって言っていました。ジプシーがやるからフラメンコ。でも、フラメンコというのはジプシー、ヒターノというように差別を感じさせない新しい言葉です。はやらせるためにそれにしていたみたいです。だから、違うんです。

— はい、ありがとうございました。

司会者 もう1人。はい、どうぞ。

— 今日は楽しみに来たんですけど、先生は踊っていただけないんですか。歌って踊っていただけないのでしょうか。

橋本 ごめんなさい。衣装がねってうか、私は今非常にわがままになっておりまして、気が向いたとき、それから、ある種の音、つまりここをなでる音、しかも決まったことを踊らない。そのときのインスピレーション、完全に。そういう踊り方になってしまっているの、非常に申し訳ないんだけど、それで本当は踊りたかったんですけど、お話で。その代わりにうちの研究所の者を連れてきたんです。このあと、踊らせます。もっとちゃんとした曲をね。ごめんなさい。気が向いたときにまたリサイタルやりますから来てください。

— じゃ、エルフラメンコとか、ああいうところでは踊ってらっしゃらないんですか。

橋本 エルフラメンコは、今はスペインからスペイン人を呼んで、そういうルートができています。だから、向こうの興行師が集めてきて、そこに送り込むというシステムができてしまっているの、日本人は使わないんです。

— ありがとうございました。

橋本 質問が出てうれしかったです。質問いただいた方々、ありがとうございました。これでは、最後に、「喜び」という曲でお別れしたいと思います。よろしくお願ひします。これ、パルマね、高い音。低い音はこうやって手のひらをかませてたたきます。でも、たたけなかったら「オーレ」、ハレオというんですけど、オーレ。それから美人、「グアッパ」、美男子、「グアッポ」。よろしければどうぞ。それじゃ、「アレグリアス」いきましょう。

(演奏)

司会者 橋本ルシアさん、あちらにおられますが、拍手をお願いいたします。それではこれで本日の講演会を終了とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

